

1 受賞した賞

日本体育測定評価学会 2016 年度学会賞

2 受賞対象論文：吉村浩一と林容市の共著論文

「日本で用いられてきた握力計・背筋力系の歴史とその現存品」(2016) 体育測定評価研究 15 巻, 33-42.

3 論文の概要

重要な体力指標である握力や背筋力を測定するために、明治以来、日本で製作または輸入し使用されてきた機器類の歴史を、今日までわが国に保存されている機器の探索を中心に跡づけた論文である。この研究は、吉村が日本心理学会資料保存委員会の活動で、わが国の主要な大学に残る古典的心理学実験機器を悉皆的に調査したデータ（それらは、日本心理学会のホームページ「心理学ミュージアム」の「歴史館」で閲覧できる）をもとに、日本体育測定評価学会の中心メンバーの 1 人としてさまざまな体力の概念や測定方法の研究を重ねてきた林の、異研究分野の 2 人による共同制作としてなしたものである。2 人はともに、法政大学文学部心理学科に所属している。

現存するものの例として、東北大学文学部の心理学研究室において今なお大切に保存されているフランス Boulitte 社製の握力計を紹介したい。形・材質の美しさはまるで芸術品のような測定器具である。この握力計を下の左図に掲げた。

また、法政大学の心理学研究室でも、その後広く使われるようになったスメドレー式握力計のわが国に残る最も古いものの 1 つを保有している（下の右図に示した）。それは、安藤研究所により製作されたもので、その研究所は、大正末から昭和初期にかけての数年間しか存在しなかった個人企業であったが、適性検査機器をはじめ第二次世界大戦前の心理学における実験を支えた歴史に残る会社である。



図 1 東北大学に残る Boulitte 社製の握力計



図 2 法政大学が保有する安藤研究所製のスメドレー式握力計